

目指せ! ネットエスパー

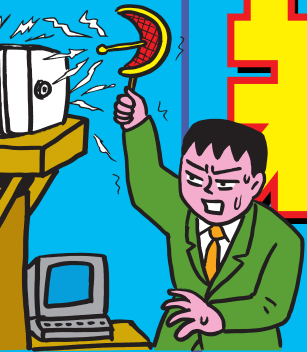


インターネット 新検索術

インターネットの中に
潜む膨大な情報
たち。そこから欲しい
ものを見つけ出し
て活用するには、

もはや1検索サイトだけでは役に立たない。ネットの海を自在に泳ぎ、必要な情報をすぐ取り出し活用する、そんな「ネットエスパー」に変身すればインターネットの利用価値は無限大になる。この連載で「ネットエスパー」に変身するスタートを切ろう!

二木麻里(ARIADNE運営) ariadne.ne.jp
Illust: Ebisu Yoshikazu



第9回 民俗音楽の資料を探す

イギリスの古い小説を読んでいたら、インド音楽の話が出てきた。主人公がラガを聴くシーンがあるのだが、これがどうもよくわからない。ラガってなんだろう。

なにやら異国情緒のある響きが気になる。音階のようなものらしいのだが、インターネットでは民族音楽やその楽語といった、マニアックな調べ物も簡単にできるのだろ

うか。それにせっき調べるのだ。なんとなくわかったではなく、きっちり正確な知識を得たいものだけれど……。

1 メタ検索で民俗音楽を一気にサーチ

キーワードはインド音楽、あるいはラガだ。直接raga というキーワードで検索するのはやさしそうだが、ほかに民族音楽という分野から探すというやりかたもできる。これはいかにも範囲が広大そうだが、どうしたらいいものか。

まずはその1。もちろん、すなわちethnic music「民族音楽」と入力して検索するのは正攻法だ。このとき、日本語ではなく英語で広く調べたほうがよい。インド音楽は外国文化なのだから、情報源を国内に限ることのアドバンテージはあまりない。ネット上の多数言語である英語の情報を通して、広範囲に世界の民族音楽を探そう。その2。ある国の国内検索サイトで、classical music「古典音楽」と引いてみると、その国の古典、すなわち民族音楽の資料も出てくる。一瞬意外な気がするが

考えてみれば当然なのだ。近代以前の音楽とは、じつは基本的にすべて民族音楽なのだから。クラシックといえ反発的に西洋音楽を思い浮かべるほうがむしろ偏っているのではないかと、逆に自分の偏向をインターネットに気付かされる。その3。世界各国に国別のウェブを配置している大手の検索サイト、たとえばLycos やYahoo! などでは、表紙の下部に各国版への案内がある。各国の民族音楽を知りたい場合、それぞれの版でmusic「音楽」の項目を降りると、そのまま自国の音楽がカバーされており、構造的にたどれる。これは音楽に限らない、資料分類の方法が各国版と同じように作られているから、ある分野の各国版を同じ方法で探せる。いわばその2の応用編だ。とはいえ、1つずつ検索サイトをたどる

のはちょっとつらい。それに直接、国別検索を行うと、どうしても言語の壁が出てくる。なんとかならないだろうか、というときはその4。メタサーチが便利なので使



Beaucoup!
 www.beaucoup.com

Lycos www.lycos.com
Yahoo! www.yahoo.com

ってみよう。メタサーチは複数の検索サイトを同時に検索するサイトだ。今回はBeaucoup! [Jump03](#)を試してみよう。検索サイトを10個同時に探せる。

ethnic music とキーワードを入力して検索を行うと、ヒット数は85件。多すぎず快適だ。URL の行末にはそれぞれヒットした検索サイトの名前が記されていてわ

かりやすい。見るとRaging、Yahoo!、Excite、infoseek、Lycos、Goto、WebCrawler、Altavistaなどで構成されている。なるほど、これなら楽そうだ。

2 キーワードをコントロールしよう

さて、もう1つのキーワード「ラガ」ではどうだろう。試しに世界最大をうたう巨大検索サイト、Google [Jump01](#) を使ってみよう。これは多言語を一気に検索してすることも可能で、ノルウェー語やスウェーデン語、ポルトガル語を含め、10を超す言語数をカバーしている。検索対象ページは10億を超えたそう。このGoogleでシンプルにraga と入れると45,899件。うーん、さすがに多い。どう絞ればいいのか？ まずこれを言語指定で英語のみに減らし、さらにキーワードを追加してみると、raga classical india music と並べてみると、4,276件。最初のヒット数の十分の一以下に減る。ほかにもたとえばclassical やtraditional など、類語を試してみるのも単語選択のコツだ。

なおこのキーワード指定のとき、スペルに自信のない単語や複数の表記があり得る単語については、一致部分だけを入れるような指定で幅をもたせるのもいいだろう。たとえばindia or indian など「or指定」を活用する。あるいは語幹だけを入れる。inde と入れてしまうとindia やindian が検索結果にかかってこないからだ。言語条件による「情報容器の大きさ」を聞かれていると想像して、容器のサイズ

を縮めたければ「and」、ゆるめたければ「or」とおぼえるのも原則としてわかりやすい。ただ、こうした細かな指定の読み取り方は検索サイトによっても異なるので、慣れない検索サイトを使うときは、あせらずに、まずhelpや入力ガイドを読んでみよう。なお、Googleではサ・チ窓のすぐ下にSearch Tips [Jump02](#) という見出しがある。これがヘルプにあたる。

このヒット内容からリソースの性質を見分けるとしたら、どうすればよいか。たとえば、いまリストの一番上には次のようなサイトが挙がった。



Indian Classical Music
...Introduction to Indian Classical Music
Introduction to North...
Description: Summary of Indian classical music and related website list.
Category: Arts> Asian> India> Artists and Art Galleries
www.aoe.vt.edu/~boppe/MUSIC/music.html - Show matches(Cache)-6k- Similar pages

もちろん同じサイトでもヒット内容は日々動いていくのだが、せっかくなので少し情報を読んでおこう。タイトル、メタタグ(短い解説など)、カテゴリー分類といった情報のあと、最終行の右端にSimilar pages という項目が出ている。これはGoogleの特徴の1つで、キーワード入力によるヒット結果とは別に類似サイトを挙げてくるのだ。クリックしてみると24件。これも参考になる。リストをえんえんと上から見ていくより早いことも多い。



Google
[Jump01](#) www.google.com
Google Search Tips
[Jump02](#) www.google.com/help.html

3 URLをきちんと読み解く

ヒットしたサイトの中から役立つページを見つける決め手の1つはURLだ。今回もここでおさらいをしておこう。「Classical Music of India [Jump](#) www.aoe.vt.edu/~boppe/MUSIC/music.html」のURLを例に読むと、まずwwwつまりワールドワイドウェブ上のはよいとして、その次は

aoe.vt.edu/ とあるからエデュケーションル、つまり学術、教育機関の発信である。その下の / boppe/ という区域には学部の名称などのほか、人名がよく来る。教授などが自分の区域を割り当てられるケースだ。ここではおそらくBoppeという人が /MUSIC/ という階層を作り、その下にさ



らに小文字で/musicのページを付けている。最後はhtmlとアンカーがきて、この下にもうページはないことがわかる。発信者は音楽を専門あるいは趣味にする教授が学生かなという見当が付く。

こんなふうURLを読む癖をいつでもつけておきたいが、ところでここはなんとという教育機関だろうか？ 知りたい場合はURLをアンカーからホームの手前まで削ってみる。このサイトのホームはaoe.vt.edu/という部分だ(インターネットでは、本来この階層部分のページを「ホームページ」という)。

見てみると、バージニア工科大学航空宇宙・海洋工学部という表紙が現れる。なるほどaoeはAerospace and Ocean Engineeringの略だったのだ。インド音

楽の情報発信源が工学部の関係者というケースにぶつかったようだ。/ boppe/階層にある解説を読むと、ボッペ氏はインド・ボンベイ出身の博士だという。

なお斜めの線/はいうまでもなく階層を区切るスラッシュである。これを末尾からスラッシュ単位で順に削ってみるやりかたは、あるページが不通のときによく試す方法だ。その階層が閉じていても、上の階層が活着していることは非常に多い。ちょうど1本の樹木を、先端の枝から太い枝へ、そして幹へと遡行するような感じである。ちなみに最近末尾のスラッシュだけを落として表記する商業サイトなどが多いが、理論的にもトラフィック上も決して美しくはない。階層を確認するために、じつは余分なパスが往復ふるからだ。全体を略

表記とするのでない限り、最後のスラッシュまで記すのがマナーだ。



Jump Classical Music of India www.aoe.vt.edu/~boppe/MUSIC/music.html

4 オンライン辞典を引きつつ、リソースを読む

さて、インド音楽に戻ろう。このサイト Classical Music of Indiaは辛い良質なオンラインブックを構成している。南インドと北インドの音楽理論についての基礎的な紹介や歴史的背景が述べられ、著名なアーティストやCDも紹介されている。お目当てのラーガについては詳細なラ・ガ表がある。見ていくと上行音階と下降音階で、構成音の数まで異なる場合も多い、複雑で精緻な構造が整然と提示されている。音楽理論はしばしば工学的なようだ。

リソースの質を見分ける方法は毎回のよう言及しているが、今回はオンライン上の事典をこまめに引く方法を挙げておきたい。ネットをサーフする際、数枚のブラウザを小さめに開いておき、そこに辞書や事典を呼び出したままキープしておく。メインリソースを読んでいくとき、確認したい用語などが出てきたらすぐにここで引く。ブラウザを分けておけば簡単に戻れるので、慣れるとまことに便利だ。

百科事典はある分野のベーシックな知識をコンパクトに提供している。そこで紹介されている項目を、眼前のリソースが押さえているかどうかだけでもその性質が見えてくる。

ここではブリタニカ百科事典のネット版、

「Britannica.com」 Jump01 を英語の代表的なリファレンスとして、日本語としては「ネットで百科@Home」 Jump02 を挙げておこう。

Britannica.comは事典としての記述だけでなく、ネット上における優れた関連リソースを推薦している。サイトの表紙にはニュースや書籍情報なども掲示されていて、ネットサーフのスタートページとしてもとても便利だ。このサイトでIndian Musicと引くと、ウェブのベストサイトとしてSurdhwani Jump03 が三ツ星で推薦されている。ネットで百科@Homeは、タイトルがややわかりにくいけど、株式会社日立システムアンドサービスが提供していて、平凡社の世界大百科事典を引けるしっかりしたサイトだ。ここで「インド音楽」を引くと、ターラ、マカームといった楽語とやらでラーガでも項目がたてられている。解説文中からはサイト内リンクがはられていて、関連項目に飛べる。残念ながら無料試用の制限時間5分をすぎると切断されるので最初から引き直さなければならないが、それでも日本語で読めるのはありがたい。ちなみにラーガはこんなふう記述されている。「ラーガ：インド音楽におけ

る曲節、旋律。1つの楽曲を一貫して流れる旋律型。単なる楽曲構成の要素としての作曲された旋律を指すばかりでなく、各ラーガはそれぞれ異なった基本音列に属し、即興的変奏にも逸脱することなく表現される。ラーガは帰属する(1)基本音列、(2)使用音、(3)主要音、(4)装飾音の性格などによって分類される」などなど。こうして事典を引きながら、先ほどのリソースを読んでいくと手応えがあり、安心感が全然違う。調べてみると、さすがにインド音楽は奥が深そうだ。サイトで推薦されていたCDを買い込んでみようかと、わくわくしてくる。



Britannica.com
Jump01 www.britannica.com
ネットで百科@Home
Jump02 ds.hbi.ne.jp/netencyhome/
Surdhwani
Jump03 www.surdhwani.org.uk/flashsite/

お助けツールここにあり!

ここまで来たオンライン自動翻訳

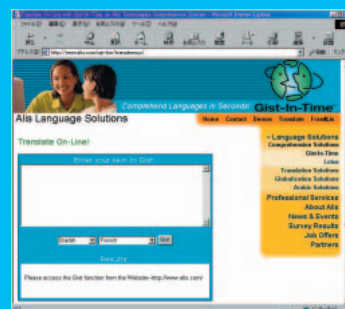
文章をペーストして翻訳ボタンを押すと、日本語に訳してくれるインターネットの自動翻訳サービス。完全文にはまだ遠いかもしれないけれど、ずいぶん翻訳機能も発達してきた。URLを入れると、そのページを丸ごと訳せるものも多い。こうした無料翻訳サービスは文章を訳す以前に、1つの単語を引くための辞書機能として役立つし、自分の知らない外国語を英語にしたいときなども便利だ。この種の相互翻訳は、以前はほぼ欧州言語に限られていたが、いまでは日本語をカバーするものも出てきた。今回はそうした無料の自動翻訳サービスから、「アリス・ジスト・インタイム」Alis Gist-In-Time [Jump01](#) を紹介したい。ここでは和訳ができる。ためにタイムズの記事から、リード部分を訳してみた。現在の自動翻訳の水準からみて、かなりいい線であると思う。事典類と並び、リソースを読み解くツールとして役立つ。ことに民族音楽といった、多言語を避けて通れない調べ物のときには助けになってくれそうだ。

【英語原文】

One more riot and England will be out Uefa threatens England football team with expulsion from Euro 2000 if there is a repeat of the English hooliganism that erupted in Belgium. 824 Britons, including professional people such as barristers and accountants, were arrested. (The Times, 19 June 2000 より引用) [Jump02](#)

【翻訳和文】

もし、ベルギーに噴火したイギリスの乱暴のリポートがあれば、より多くの暴動、およびイングランドが外へUefaになるだろう1(人)は、ユーロ2000から排除もつイングランド・フットボール・チームを脅かす。(法定弁護士、および会計係といったプロの人々を含む) 824 Britonは、逮捕された。

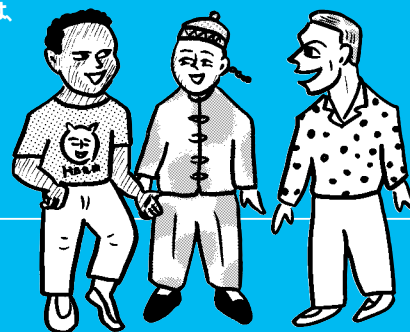


Alis Gist-In-Time

[Jump01](#) www.alis.com/cgi-bin/transdemo.pl

The Times, 19 June 2000

[Jump02](#) www.sunday-times.co.uk/news/pages/Times/frontpage.html?999



5

今月のポータルキット

今回、インターネットの優れたポイントとして2つのことを挙げてみたい。1つはインターネットが巨大な「1つの場」であると同時に、じつは無数の地域情報の集積でもあるということだ。多様な言語や伝統芸術がここには発信されていて、民族音楽や地域文化の豊かな共鳴空間にもなっている。ぜひそのことに気付いておきたい。テクノロジーが生んだ、思いがけない地域性の渦はネットの魅力の1つだ。

もう1つは、漠然とした情報だけな

く、きっちりとした情報をとりだす指針としてのオンライン事典だ。ネット上には玉石混交の辞書、事典があるけれど、しっかりした辞書は本当に優れた水先案内人になってくれる。紙の本を読むときに辞書を引くように、ウェブを読むときにもどんどん事典を引こう。座右の一冊ならめ画面の一隅に「辞書ブラウザ」。見知らぬサイト群をさまようことだけが調べ物ではないと気付くはずだ。

1	選択	検索サイトの各国版を連続検索・メタ検索サイト
2	基本	検索キーワードをコントロール
3	蓄積	URLをきっちり読み解く
4	応用	手元で辞書・事典を参照しつつリソースを歩く
5	援護	ここまで来たオンライン自動翻訳

二木麻里(ふたき まり)

上智大学外国語学部卒。翻訳家。社会・人文科学系の国内外資料を案内した総合サイトARIADNEを運営。著書に『思考のためのインターネット』(筑摩書房ちくま新書)など。



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp